

< 第 2 回 IDS 開発学修士課程 (MPhil) について >

2003 年度 10 月より、IDS の開発学修士課程 (MPhil in Development Studies 27 期生) に在籍している園田智也と申します。今週は MPhil プログラムのコース内容とこれまでの授業、学生たちの様子を簡単に紹介したいと思います。

IDS の開発学修士課程は 2 年間のプログラムとして構成されています。その期間、開発の理論を経済学や社会学、人類学の視点を取り入れ、学際的かつ体系的に学ぶほか、「グローバリゼーション」や「貿易と財政管理」、「環境問題」、「公共部門の経営管理」、「ジェンダー」、「参加型開発」といった今日的なテーマを実際の開発政策の観点から学び、理解を深める機会が与えられています。また、MPhil の学生の多くは夏期休暇を利用し、各自の専門分野や研究地域に即した NGO や国際機関でのインターンへ積極的に参加しています。

現在、1 年目の秋学期では、MPhil の学生は開発学理論と統計学、経済学 (経済学学士取得者は開発社会学の授業を選択可) の計 3 つの授業を受けています。簡単に授業内容を紹介すると、開発学理論の授業では、50 年代から現代にかけて発展途上国の「経済発展」及び「貧困」「開発」をテーマにさまざまな学派が議論を重ねてきた開発理論を中心に講義やセミナーがなされ、学生たちは毎週プレゼンやディスカッションを通して各時代、各地域における開発理論の理解と興味を深めています。また、開発における Contemporary issues として「貧困削減」や「人権」、「開発社会学・開発人類学」、「市民社会とガバナンス」、「人間開発」などをテーマに、その分野で活躍する研究者たちによるセミナー形式の授業があり、毎週、生徒たちと講師との間で活発な議論がなされています。統計学では、統計の基礎的な理論を学ぶ講義と平行して、エクセルを使っのセミナーがあり、統計の実践的な手法も学びます。経済学の授業は、講義とセミナー、チュートリアルで構成されており、春学期に履修することになる開発経済学の準備段階として、秋学期内にミクロ経済とマクロ経済の基礎を学ぶことになっています。

MPhil27 期生は計 21 名、うち 5 名が日本からの学生です。学生はアジア、アフリカ、アメリカ、中東、ラテン・アメリカ、ヨーロッパといったさまざまな文化からやってきており、開発分野における職歴・経歴も多様です。ローカル NGO や国際 NGO、民間企業、国際機関に勤めていた学生に加え、私も含め学部時にそれぞれの地域においてボランティアやインターンを通じて開発分野に関わる知識と関心を深め、卒業後に直接 MPhil に進学した学生も少なくありません。まさに、学生の「多様性」に満ちたコースといえます。また、授業以外に、学生たちは開発分野における個々の体験や職務経験を活かし各自でワークショップや勉強会を積極的に開き、互いの知識や意見を共有し合うなど、知的好奇心に溢れた学生たちが多いという印象を強く受けるほか、自発的に「学ぶ」ことの姿勢に日々新鮮さと刺激を受けます。

11 月の半ばも過ぎ、サセックス大学の周りに広がる広大な自然も、秋の紅葉から冬の景色へと変わり

つつあります。冬を目前にしたこの時期、MPhil27の学生たちは日々の授業や課題図書、各自の関心のあるテーマにおける学業に励むほか、IDSでの初めてのターム・ペーパー執筆にむけその準備に取り掛かっているところです。

2003年11月16日

開発学修士課程(MPhil in Development Studies 27期生) 園田智也



(IDS に訪れたサセックスの秋)